

研究ノート

〈資料の紹介と研究〉  
マックス・ヴェーバーの  
フライブルク大学移籍をめぐって  
——人事の実相への補遺——

野 崎 敏 郎

〔抄 録〕

ヴェーバーのフライブルク大学移籍人事（1893～94年）において、エーリヒ・マルクスが大きな役割を担っていた。また同時代の人事例から、大学の自治と自由を求める若手教員の動向が浮上し、とりわけカール・ハインリヒ・ベッカーの台頭が重要であることが明らかになった。一方、アルトホフは、ヴェーバーを利用してラーバンをベルリンに招聘することに失敗した報復として、ベルリン大学法学部にたいする人事不作為を続け、エルスターがそれを引きついだが、フリードリヒ・シュミットによるベッカー起用によって、プロイセンの大学行政が大きく方向転換していく状況も明らかになった。

キーワード：大学の自治、ヴェーバー、アルトホフ、エーリヒ・マルクス、カール・ハインリヒ・ベッカー

I フライブルク大学移籍問題への補充資料について

本誌前号でひとまず完結した「マックス・ヴェーバーにかかわる二つの人事の実相——フライブルク大学移籍とハイデルベルク大学正嘱託教授案件——」（野崎敏郎 2021-22, 以下「前稿」と略記）の執筆中、筆者は、とりわけフライブルク大学移籍問題にかんする追加調査が必要であることをしばしば感じた。しかし、コロナ禍にあって海外渡航が困難であることから、この連載は、2020年春までに閲覧しえた史料・文献と、日本国内で閲覧できる文献とに依拠してまとめ、昨年（2022年）5月に脱稿した。

その後、海外渡航調査が可能になったことから、8月から9月にかけてドイツ各地における調査を実施し、重要な史料・文献を閲読・考証し、新知見を得て、前稿を補充・補強することができた。時間的な制約から、調べつくすることができなかった事項が多々あり、今後さらなる追加調査が必要だが、それでも、前稿では推測に留めていた事項の史料的根拠をいくつも発見し、たいへん有益であった。そして、今回閲読したなかでもとりわけ未公刊史料中の重要記述は、この問題に関心を有する研究者にひろく——またなるべく早く——知らせるべきだと判断し、2020年以前の調査においてすでに判明していた新事実と併せて、ここに公表することにした。

本稿は、前稿にたいする補遺・補充であり、資料の紹介とその解説を並べたものであり、論文としてまとめたものではないが、おそらくまだ日本人の誰も読んでいなかったであろう重要史料・文献の情報を提供し、またそれにもとづく正確な史実理解をも提供し、ヴェーバーの実像とその時代の実相を解明する一助とすることを意図している。

今回の調査で得られた資料としては、ベルリン大学開講科目一覧（VVB）に記されている法学部の商法科目担当者、フライブルク大学哲学部教授会における人事関連の審議・協議記録、バーデン政府側に遺されているフライブルク大学・ハイデルベルク大学に招聘された教授たちの人事記録、そしてその当人たちの回想や書簡がある。また、アルフレート・ヴェーバーをはじめとして、ハンブルク拓殖研究学院からも就任要請された者がおり、学院側と教授候補たちとの往復書簡によって、バーデンがプロイセンやハンブルク市と競いながら人材確保に努めている様子を窺うことができ、また各教授候補の意向も判明した。

## II フライブルク大学哲学部とヴェーバー

1893年7月6日に開かれた1893年夏学期第6回哲学部教授会は、ヴィーンに去るオイゲン・フォン・フィリップヴィチの後任として誰を推薦するかを審議した重要な会議である<sup>(1)</sup>。ここでは、その審議状況を知るために、この教授会の第3案件にかんする議事録の記述の全文を訳出する（UAF/B 38/19: 234 f.）。

第3案件 国民経済学正教授ポストにかんする〔候補推薦〕委員会の報告。フォン・フィリップヴィチ教授の報告した〔推薦リスト〕：

- 1 マックス・ヴェーバー博士，ベルリンの私講師
- 2 カール・フックス博士，グライフスヴァルトの私講師
- 3 W・ロット博士，ミュンヘンの私講師

長い議論の後、本学部は、本政府に提出した旧推薦リストへの補足として、以下のように推薦することを決定した。

第1位としてマックス・ヴェーバー博士

第2位としてカール・フックス博士

これに加えて、本学部は、マックス・ヴェーバー博士が〔当該ポストにとって〕もっとも十全たる資質を有する者だと断固として判定すること、および場合によってはヴェーバー博士とフォン・シュルツェ＝ゲファールニッツ博士とのあいだの年齢関係に起因して解決されるべき困難が生じる可能性があるが、その困難が克服されることに期待をかけるものであることを、枢密上級参事官アルンスペルガー博士に宛てた〔学部長の〕私信において強調することを決定した。

フライブルク大学哲学部とバーデン法務・文部省大学局長ルートヴィヒ・アルンスペルガーは、1893年2月以来、フリードリヒ・フライヘル・ヴィーザー、マックス・ゼーリング、ルートヴィヒ・エルスターらの招聘の可能性を探ったが、これらの交渉は不調に終わった(Biesenbach 1969: 200)。その後、フィリップ・ヴィーチを中心とした教授候補推薦委員会は、ヴェーバー、フックス、ロットの3名を記した推薦書を政府に提出したが、例によってアルトホフによる横槍が入り、招聘工作が妨害されることが予想された。そこで、この日の教授会においては長い議論が必要となり、最終的に、第1位ヴェーバーをつよく推薦することと、ロットを除外することとが決定された。

ヴェーバーについて、哲学部は、国民経済学正教授ポストにとって「もっとも十全たる資質を有する者 (die genügendste Persönlichkeit)」だと最高の評価を与えており、このことを、アルンスペルガーにたいして「断固として (entschieden)」主張している。

ロットが外された理由について、ロットがミュンヘンでブレンターノに重用されており、ブレンターノがロットを手放そうとしないだろうとフライブルク側が推察し、見込みが薄いとみなされたためであるという可能性が高いと筆者は考えている(野崎敏郎 2011: 31頁)。

また、最後に記されているヴェーバーとシュルツェ＝ゲファールニッツとの年齢関係の問題というのは、二人とも1864年生まれであることを指している。人事にさいしては、一般に、ひとつの学部のひとつの部門にかんして、正教授とそれ以外の教員とのあいだに年齢差をつけるのが望ましい。そうすれば、年長の正教授が引退したとき、年少の教員をその後任へと昇任させることができるからである。これにたいして、シュルツェ＝ゲファールニッツは、このときすでに哲学部の員内准教授に就任することが決定しており、もしもそこに同い年のヴェーバーを正教授として迎えると、ひとつしかない経済学正教授ポストをヴェーバーが占めているかぎり、シュルツェ＝ゲファールニッツを正教授に昇任させることができなくなる。この事態を哲学部は懸念している。もっとも、このことは、推薦リストに挙げられているフックスとロット(ともに1865年生まれ)にも当てはまるので、哲学部としては、とにかくヴェーバー招聘を第一に考え、もしも年齢の問題が生じる場合には、学部がその打開を図るよう努めることにし

たのである<sup>(2)</sup>。

哲学部長エーミール・ヴァールブルクは、この教授会の決定を受けて、バーデン政府各方面に根回ししたあと、就任要請状をヴェーバーに直接送付しており、それは7月14日に彼の許に届けられた（MWGII/2: 430 f.）。これを読んだヴェーバーが、フライブルク転出の準備に取りかかり、引っ越しの算段をすすめていることについてはすでに解明した（野崎敏郎 2021-22(1) : 54 頁）。ただし、あらためていうまでもなく、正教授の任命は政府の専決事項であって、大学に正教授の任命権はないから、哲学部長の就任要請状は、あくまでも「要請」にとどまる。ヴェーバーは、バーデン政府（ノック大臣）からの正式な招聘状を待たなくてはならないのである。

一方、哲学部教授会→フライブルク大学評議会→バーデン法務・文部省というルートでヴェーバー招聘に向けた手続がすすめられていき、評議会が本省にたいする申請書を作成したのは7月14日のことである（GLA 235/43005）。したがって、アルンスペルガーがヴェーバー正式招聘のための作業に取りかかるのは7月15日からである。そして問題は、アルトホフがヴェーバーの転出をすんなり認めるかどうかである。

前稿で解明したように、7月下旬にアルンスペルガーとアルトホフとのあいだで交わされた往復書簡は、その後隠滅されたため、われわれはその内容を直接知ることができない（野崎敏郎 2021-22(4) : 71-72 頁）。しかし、アルトホフがアルンスペルガーに送りつけたデマ情報は、アルンスペルガーからヴェーバーに伝えられ、憤慨したヴェーバーは、7月26日付書簡のなかで、その内容を母に伝えている。また、アルトホフとアルンスペルガーとのあいだの激しいやりとりについては、7月29日の会見（会食）のさい、アルトホフの口からヴェーバーに伝えられた（野崎敏郎 2021-22(1) : 55 頁）。こうした間接的な情報から、アルトホフによる就職妨害工作の実相を把握することが可能である。

この会見において、ヴェーバーは、アルトホフが二つのデマ情報を流していることを確認した。ひとつは、ヴェーバーにはフライブルクに移るつもりがなく、ただプロイセンにおける栄達のみを考えているというデマ、もうひとつは、プロイセン政府がすでにヴェーバーと1893/94年冬学期の雇用契約を結んだとするデマである。そこでヴェーバーは、ただちに、エーリヒ・マルクスに宛てて電報を打ち、受けとったマルクスは、週明け月曜日の教授会で、この電報について報告した。

『マックス・ヴェーバー全集』には、この電報の内容が記されており（MWGII/2: 448, Anm. 3）、これは前稿において紹介した（野崎敏郎 2021-22(1) : 58 頁）。『全集』では議事録の一部のみが引用されているが、1893年7月31日に開かれた1893年夏学期第13回哲学部教授会の第2案件全体が重要なので、以下に、この案件にかんする議事録の記述の全文を訳出する（UAF/B 38/19: 241）。

第2案件 マルクスは、マックス・ヴェーバー博士からの電報について報告した。それによると、ベルリン在住の同氏〔＝ヴェーバー〕は、〔ベルリンで〕なんの義務も負わされておらず、当地〔＝フライブルク〕への招聘にただちに応ずるつもりである。本学部は、マルクスの勧めにもとづき、目下アルンスペルガー博士がカールスルーエを離れていることから、国務大臣ノック閣下宛に、本学部長〔＝ヴァールブルク〕が、この電報にかんして報告する旨を決定した。

みられるように、哲学部は、当然にもこの電報を重要視している。アルトホフの流した二つの情報が事実と反すること、逆に、ヴェーバーはまだ1893/94年冬学期（以降）についてベルリン大学と契約を交わしておらず、無条件かつ即座にフライブルクに赴任する用意があることが、本人自身によってはっきりと言明されたのである。哲学部においてすでに推薦順位第1位に確定している彼自身がこのように意思表示をなしたのだから、哲学部は、この情報をバーデン政府と共有し、断固たる態度でヴェーバー招聘を実現させるよう政府に働きかけようとしている。とくに、こうした学部の決定が「マルクスの勧め」によるものであるという事実は注目に値する。この学期に教授団に加わったばかりのマルクスは、自身の体験<sup>(3)</sup>と勘案してアルトホフの策謀を見破り、それを打ちくだくために教授会で熱弁を振るい、また友人ヴェーバーの資質・気質<sup>(4)</sup>を高く評価し、学部とバーデン政府とが足並を揃えてヴェーバー招聘を実現するために尽力する。

1893年夏学期の教授会がこれが最終であり、次の教授会は、1893/94年冬学期の開講前後にあたる11月3日である。したがって、7月31日から10月末までの哲学部の動向を、教授会議事録から知ることはできない。別の記録から探してみると、まず、夏学期第13回哲学部教授会第2案件の決定事項について、学部長ヴァールブルクはただちに実行しようとしたと思われる。ところが、7月下旬に、アルンスペルガーのみならずノックもまたカールスルーエを離れていた（MWGII/2: 430）。そのため、当該電報にかんする報告は、8月初旬頃にこの二人のうちのどちらかが本省に戻ってきたあとになったことが確実である。

おそらく8月初旬に、ヴェーバーの電報にかんするヴァールブルクの報告を読んだアルンスペルガーとノックは、ただちにアルトホフの奸計を悟ったが、性急にヴェーバー招聘をすすめることはしなかった。前稿で解明したように、このときバーデン側が招聘を強行すると、アルトホフの反発を招き、この人事がかえってうまくすすまなくなることが予想されたからであり（野崎敏郎 2021-22(2): 39頁）、またこれ以降、バーデンとプロイセンとの関係がさらに悪化することも懸念されたからである。

こうしたバーデン側の逡巡ないし一時的静観を知ったヴェーバーは、8月5日におけるアルトホフとの再度の会見において、やむなく、1893/94年冬学期に准教授としてゴルトシュミットの代講を務めることにして、契約を交わしたが、このときアルトホフから求められた念書へ

の署名をすべて拒否した。またアルトホフがひそかに追記したフライブルク移籍の辞退という項目について、すぐさま確認書兼暴露書簡（抗議状）を送り、これを撤回させた（野崎敏郎 2021-22(1)：59 頁）。

8 月から 10 月にかけて、フライブルク大学哲学部、バーデン法務・文部省、ヴェーバーの三者間で情報交換がなされ、バーデン側は、アルトホフのラーバント招聘工作が不調であること、またそのためヴェーバーの員内准教授任命も遅れていることをヴェーバーに知らせた（野崎敏郎 2021-22(2)：39-40 頁）。

1893 年末から 1894 年 3 月までのバーデン側の動向についてはすでに略述したので省略するが（野崎敏郎 2011: 29-33 頁）、ひとつ重要なのは、フライブルク大学哲学部が作成した最後の推薦書が 1894 年 1 月 20 日の 1893/94 年冬学期第 7 回教授会に提出されたとき、教授候補推薦委員会にマルクスが加わっていたことである（UAF/B 38/19: 251）。ヴェーバーと親しいマルクスが着任後すみやかに学部内で信頼を獲得し、この人事の最終局面において重要な役割を担うにいたっていることがわかる。

#### ヴェーバーとマルクスの失われた往復書簡

ヴェーバー招聘人事においてマルクスの果たした役割について考察するさいに重要なのは、1893 年から 1894 年にかけてヴェーバーとマルクスのあいだで——おそらく少なくない数の——書簡が交わされていたという事実である。ヴェーバーの 1894 年 4 月 12 日付エーミール・ヴァールブルク宛書簡をみよう（MWGII/2: 527）。

昨年〔＝1893 年〕マルクス教授が学部の知見をもって小職と交わした文通に関連しまして、当時の学部長である先生に謹んでお知らせいたします。来たる秋〔＝1894/95 年冬学期〕において、フォン・フィリップovich 教授の後任として就任せよとの招聘状が本省の側からいますでに小職の許に届いており、小職はこれを受諾いたしました。そして願わくば、聖霊降臨祭頃に直接お目にかかりたく存じます。

この書簡から、ヴェーバーとマルクスのあいだで書簡が交わされており、そこにおいてヴェーバー招聘にかんする情報交換がなされていたことを確認できる。

このヴァールブルク宛書簡にあつては、ヴェーバーは、前置きもなくいきなり、自分がマルクスと交わした文通について言及している。なぜこのような唐突な書き出しになったのか、事情を探ってみよう。

この書簡の 6 日前、4 月 6 日に投函されたと推定されるフリッツ・バウムガルテン（フライブルク在住）宛葉書の追伸において、ヴェーバーは、フライブルク大学哲学部長の氏名を書きおくるよう依頼していた（MWGII/2: 524）。つまり、6 日の時点で、ヴェーバーは学部長の氏

名を確認していないのである。そして、12日までにフリッツからの連絡が来て、ヴェーバーは、ヴァールブルク宛に12日付書簡を書いたのである。

この状況から、4月6日にヴェーバーがアルトホフのオフィスを訪れるためベルリンに出向いたとき、第一に、フライブルク大学哲学部長が自分と連絡をとりたがっていること、また第二に、学部長が、フライブルク人事に関連して自分とマルクスとのあいだで交わされていた往復書簡に関心をもっていること、この二点を知らされたと推定できる。ヴェーバー宛に書簡を送ってこれを知らせたのはマルクスとみられる。ベルリンにきたヴェーバーはこのとき自宅に立ちよったことであろうが、3月30日に親戚の結婚式に出席していた妻マリアンネが4月6日までにベルリンに戻っていたかどうかは判然としない (MWGII/2: 518)。すでに戻っていたとすればマリアンネか、あるいは母ヘレーネから、マルクスからの来簡をみせられたヴェーバーは、マルクスとの文通についてフライブルクから問い合わせが来ており、哲学部長に至急連絡するように求められていることを知ったのであろう。しかし、新学期になって学部長が交代した可能性があることから、ヴェーバーは、フライブルク在住のフリッツ・バウムガルテンに葉書を送って、いま誰が学部長なのかを確認した。1894年4月に、たしかに学部長はベルンハルト・フォン・ジムゾンに交代するが、フリッツは、フライブルク大学哲学部に問い合わせ、学部側は、ヴェーバーの回答を、前学部長であるヴァールブルク宛に送るよう指示したのであろう。だからヴェーバーは、「当時の学部長である先生」と書いている。

このように考証すると、ヴァールブルクは、ノックとアルンスペルガーがヴェーバーに正式な招聘状を送ったことを確認すると、ただちにヴェーバーとマルクスとの文通内容を確認しようとしたことがわかる。ヴァールブルクは、アルンスペルガーからの要請によって、まずマルクスが保有しているヴェーバーの書簡群を《検閲》し、つぎに、マルクスを通じて、ヴェーバーに、マルクスから送られてきた書簡群を持参するよう求め、聖霊降臨祭頃にヴェーバーと会見してこの書簡群をも《検閲》し、しかる後に、将来この往復書簡がけっして表に出ないように《対処》したとみてよからう。もしもこの往復書簡が遺されていれば、フライブルク大学移籍問題にかんする決定的な証拠となったであろうことは確実である。しかしアルンスペルガーとヴァールブルクの揉み消し工作のため、現在にいたるまで、われわれ研究者はこれを目にすることができないのである。

### Ⅲ ラーバント問題と商法担当教授の不在

前稿で解明したように、アルトホフは、ラーバントをベルリン大学法学部に招聘し、その協力を得て哲学部私講師アーロンスを追放しようと企てていた。しかしその企みに気づいた哲学部・法学部の教授たちは、ラーバント招聘阻止に成功するとともに、アーロンス追放を阻止し、大学の自治を堅持すべく、全学的な運動を展開した。それにもかかわらずアーロンスは罷

免されるが、この運動の結果、その後アーロンス法が他の教員に適用されることは阻止された。またプロイセン以外の邦国の法律家による批判もあって、同法は死文化した（野崎敏郎 2021-22(3)：21-26 頁，同(4)：60-61 頁）。

しかし、このとき鋭く顕在化したベルリン大学教授多数派とアルトホフとの対立は、法学部に大きな困難をもたらした。アルトホフが、法学部多数派教授陣への報復として、商法担当正教授（ゴルトシュミットの後任）の招聘を拒否したのである。

### アルトホフとエルスターの不作为

前稿を執筆した時点では、アルトホフの引退（1907 年）とその死（1908 年）にいたるまで、ベルリン大学法学部には商法担当正教授が不在のままであることを確認していたが、昨年 8 月に、その後の時期の科目担当状況を調べることができ、以下の事実が判明した。

アルトホフの引退後、プロイセンの大学人事はエルスターが牛耳っており、その下にあつて、依然として商法担当正教授が任命されないという事態が継続している。そのため、ラーバント招聘阻止のために中心的な役割を果たしていたブルンナー、コーラー、ギールケが、ゴルトシュミットの穴を埋めるために、大きな教育負担を余儀なくされており、彼らは、准教授や客員の実務家の力を借りて、商法科目を切りまわしている。准教授マルティン・ヴォルフ（Martin Wolff, 1872-1953）が、1914 年まで、週 4 コマ（1 時間ずつ）の商法講義等を担当しており、また弁護士・銀行家ヤーコプ・リーサー（Jakob Rießer, 1853-1932）が、1915 年まで、客員嘱託教授として教鞭を執っており、やはり週 4 コマの商法講義等を担当している。ヴォルフ→ブルンナー→リーサーとリレーするかたちで、三名の講義（1 時間ずつ）が 3 コマ（午前 10 時から午後 1 時まで）連続し、それが月・火・木・金の週 4 日おこなわれることもあった（VVB：各学期）。聴講する学生にとっては、週 12 時間の拘束になるので、講師にとっても学生にとっても負担が大きかった。

ようやく商法関連の陣容が刷新されるのは 1914 年のことである。エルンスト・ハイマン（Ernst Heymann, 1870-1946）は、1899 年から 1902 年までベルリン大学法学部准教授職にあり、そのとき商法科目も担当していた。その後ケーニヒスベルクとマールブルクを経て、1914 年に、正教授としてベルリンに復帰する。また同年には、准教授クラウディウス・フライヘル・フォン・シュヴェリー（Claudius Freiherr von Schwerin, 1880-1944）と私講師アルトゥール・ヌスバウム（Arthur Nußbaum, 1877-1964）が加わっており、1917 年にシュヴェリーがシュトラースブルクに転出するまで、商法部門は、ギールケ、コーラー、ハイマン、シュヴェリー、ヌスバウムが担うことになる。

アルトホフもエルスターも、政治的な思惑から不作为が続けていたことが明らかであり、この二人は、ベルリン大学法学部における教育活動の維持・強化といったことにはおよそ関心がないことがここに露呈されている。1914 年にエルスターがハイマンを招聘したのは、さすが



に現状では教育上の支障が大きいので、ようやく新任人事を認めたからであろうと推察される。またこのことは、エルスターが、ラーバントのベルリン招聘を最終的に諦めたことをも意味しているのかもしれない<sup>(5)</sup>。

#### 商法担当正教授の不在とヴェーバーの処遇との関連

ベルリン大学法学部におけるヴェーバーの地位は、商法担当正教授が就任するまでの時限つき雇用であった。そして法学部多数派教授陣にたいするアルトホフ（とエルスター）の執拗な嫌がらせのため、商法担当の新任正教授（ハイマン）が就任したのは、じつに1914年のことである。したがって、もしもヴェーバーが1894年にフライブルクへの脱出に失敗していれば、彼は、薄給の員内准教授として、場合によっては1914年までベルリン大学で飼育殺しに遭う可能性もあった。あるいは、せいぜい、かなり年をとってからプロイセンの地方大学法学部でようやく薄給の正教授職にありつくといったところが関の山だった。そして彼が希望する経済学系のポストにはついに手が届かないという事態もありえた。

こうした付帯事情すべてを考慮すると、本稿に訳出したヴェーバーの電報に明示されているように、フライブルクから打診されたあと、アルトホフによる就職妨害工作を察知した彼が、この工作から逃れるため、バーデン政府から正式に招聘されれば条件を問わずただちに受諾することをいちやく明言しておいたのは、まったく当然で正しい判断であったことが誰の目にも明らかである。

### Ⅳ ヴェーバーの同世代の学者たちと大学人事の諸相

以下に、ヴェーバーと同時代の多くの大学教員たちがどのような事態に直面し、それにたいしてどう判断し、どう決断したのかをみていく。これによって、第二帝政期の大学問題の——これまであまり光が当てられていなかった——いくつかの実相が浮き彫りになるだろう。

まず、アルンスペルガーが関与したバーデンの事例をいくつか取りあげる。

#### Ⅳ-1 アルンスペルガーが手がけたバーデンの人事例

##### マルクスの事例（1892年、1901年）

1892年に発議されたフライブルク大学哲学部の歴史学教授人事は難航した。6月20日の教授会において、挙げられた候補者について何度も投票がなされ、最終的に次のように決まった（UAF/B 38/19: 191）。

第1位 フェーリクス・シュテューフェ教授、ミュンヘン

第2位 フリードリヒ・フォン・ベツォルト教授，エルランゲン

第3位 エーリヒ・マルクス博士，ベルリン

第4位 ヴィルヘルム・ブッシュ教授，ライプツィヒ

教授候補を3名に絞るのが通例だが，このとき教授会は絞りきることができず，またマルクスとブッシュにかんする最終投票では，7対4（棄権1）でマルクスが第3位となっており，全体として決め手に欠いたという感がある。結局，40歳代の中堅二名が上位，30歳を超えたばかりの新進二名が下位となった。

この推薦書を受けて，アルンスペルガーは，上位者から順に交渉に入ったと思われるが，シュテイーフェ（Felix Stieve, 1845-1898）もベツォルト（Friedrich von Bezold, 1842-1908）も動かなかった模様で，アルンスペルガーはマルクスの招聘工作をすすめる。このときアルトホフが——例によって——マルクスをプロイセンに囲いこもうと画策したことについては前稿で述べた。しかしアルトホフは，マルクスに与えるポストをみつけれなかったようであり，またアルンスペルガーからアルトホフの尊大な態度について聞かされ，不快感を抱いたマルクスは，迷わずフライブルクに赴任する（野崎敏郎 2021-22(1)：44頁）。ところが，低位者の採用であることと，私講師としての勤務（1888年夏学期から1892/93年冬学期までの5年間）は年俸査定の対象とされないことから，初任給<sup>(6)</sup>の査定は本俸3300マルクという非常に厳しいものであった（GLA 235/2291: Standesliste - Freiburg）。結婚し，この時点で2人の子供のいる彼の一家が，この初任給と聴講料で生計を立て，さらに当座の研究と教育のための図書を揃えるのはかなりむずかしかったにちがいない。彼は，結局2年後にライプツィヒに移籍する<sup>(7)</sup>。

ライプツィヒで業績を積んだマルクスは，その実績をもって1901年にハイデルベルク大学に移籍する。このときの年俸査定額は当初8260マルクだったが（GLA 235/2291: Standesliste - Heidelberg），マルクスは大臣と直接交渉し，年収1万1000マルクで合意した（ebd.: 1901年7月4日付指示書抜粋）。そこでアルンスペルガーは，年俸を9800マルクと再査定し，住居手当760マルクを加えて1万0560マルクとし，さらに足りない440マルクについては，500マルクの副俸給を加えて合計1万1060マルクとした。これなら，3人目が生まれて5人家族になったマルクス一家が落ち着いて暮らしていくことができる。マルクスはまた，ライプツィヒを引き合いに出し，歴史研究の充実のための手立てなど，さまざまな要求を出し，おおむね受けいれられた模様である（ebd.）。アルンスペルガーが手がけたマルクスのこの二つのケースは，国務歴にカウントされない私講師から正教授への任用の厳しさ，実績を積んだ正教授を他国から招聘するさいの手厚い待遇との対比をあざやかにしめている。

# シュルツェ=ゲファーンニッツの事例 (1893~99年)

アルンスベルガーとフライブルク大学は、かなり早い時期に、前稿でみたアルトホフによるヴェーバーのフライブルク移籍にたいする妨害工作を予想し、1893年秋にヴェーバーを正教授として招聘することが困難かもしれないと踏み、フィリップヴィチが去ったあと、経済学科目に空白が生じないように、急遽、ライプツィヒ大学私講師のゲルハルト・シュルツェ=ゲファーンニッツをフライブルク大学員内准教授に任命することを決定する。その後、彼とヴェーバーとが協力して改組計画を練り、1896年秋に、経済学部門が哲学部から法学部に移管され、法学部が法学・国家学部へと改称されるとともに、経済学部門の正教授が一名増員され、シュルツェ=ゲファーンニッツが正教授に昇任する。そして彼は1899年に加俸されるのだが、この間の彼の処遇をめぐる動向はかなり錯綜している。

彼の年俸（本俸のみ）の推移を、本稿に必要な範囲でしめたのが表1である。

表1 シュルツェ=ゲファーンニッツの年俸

日付	年俸	備考
1893年10月1日	2300	員内准教授
1894年4月1日	2600	員内准教授
1896年7月1日	3000	正教授（内定）
1899年4月1日	3300	正教授

出典：UAF/B 24/3510: Standes-Liste.  
単位：マルク

これを見ると、員内准教授としての勤務半年で300マルク加俸されたのに、その後2年半の勤務で1896年に正教授になったときの加俸はわずか400マルクである。このときの年俸3000マルクは、マルクスの初任給よりもさらに低い。さらに奇妙なのは、正教授に昇任して法学・国家学部に移籍したまさにそのとき（1896/97年冬学期）、

彼が研究休暇に入ったことである。この休暇が政府に認められたのは10月29日であり、これは、当の冬学期の授業が開始される時期である（UAF/B 24/3510）。

もうひとつ奇妙なのは、1896年7月1日からの年俸額が確定したのが、1897年1月24日のことだったという事実である。したがってこのとき、新たな年俸額は、7カ月近くも遡って適用されたことになる。このことを確認した政府側の覚書（1897年1月24日付のAktennotiz）には、さらに1899年7月28日付の追記があり、表1にしめた同年4月1日付の加俸後の年俸額が記されている（ebd.）。

これらの文書を総合すると、次のような事情が浮上する。彼の研究休暇の目的は、大銀行業務における彼の研究の継続（Fortsetzung seiner Studien in einem größeren Bankgeschäft）であった（1896年10月29日付休暇許可書、ebd.）。彼の研究は、「経済〔の研究〕と〔経済の〕実務活動との緊密な結合」を要するという性格のものであったため（Zielenziger 1926: 33）、教授会における討論参加など、正教授としての職務に忙殺される前に、どうしても銀行業務にかんする実地研究を集中的にやっておきたい彼は、政府とのあいだで、研究休暇を認めてもらい代わりに、最初のうちは正教授としての年俸を低く抑えておくという合意をなしたのである。そして、休暇後に精勤すれば加俸することについても事前に合意がなされていたので、実際に1899年に3300マルクに引き上げられたことが、この覚書に加筆され、記録に留

められたと考えられる<sup>(8)</sup>。

### リッケルトの事例（1896年）

ハインリヒ・リッケルトは、1891年にフライブルクで教授資格を取得して教鞭を執っており、1894年には員外准教授に任命された。1896年に、彼はロストック大学から招聘されるが、これを断り、同年9月にフライブルク大学哲学部正教授に就任する（Drüll 1986/2019: 655）。この事実関係から、筆者は、リッケルトがロストックの条件をバーデン側に提示し、それを、フライブルク正教授就任のための交渉材料としたのではないかと推測した。つまり、ロストック大学の初任給は4200マルクと定められているので<sup>(9)</sup>、リッケルトは、バーデン側にたいして、これと同等かこれを上回る条件を要望したのではないかと考えたのである。そこで昨年9月に彼の人事資料を閲覧したところ、彼のフライブルク初任給はたしかに4200マルクであることが判明した（UAF/B 24/3012: Standesliste）。後述のマイネッケとアルフレート・ヴェーバーの事例にもしめされているように、バーデン政府は、正教授候補との条件交渉に応じている。これは、ひとつには、バーデンでは大学教員の雇用条件が明文化されておらず、つまりそれが固定化されていないこととかかわっており（Biermer 1903: 37）、バーデンの文部官僚は、他の邦国の大学と競いつつ、優秀な人材を引きぬくために柔軟に対応しているのである。またもうひとつ、マルクスのフライブルク招聘の事例に認められるように、場合によっては初任給を低く抑えようとする意図もあった。

前稿において、筆者は、まだ正教授になっていない者は、招聘時に、就任後の待遇や研究条件について交渉する余地がきわめて小さく、彼らの多くは、決められた初任給で雇用されざるをえないと指摘した（野崎敏郎 2021-22(3): 35-36頁）。この記述中で「余地がきわめて小さい」「彼らの多く」という含みのある表現をとったのは、このリッケルトのケースを念頭に置いていたからである。そして今回の調査の結果、固定俸のない員外身分の者であっても、複数の大学から正教授として就任要請されている場合には、たしかに待遇や研究条件について交渉する余地が生ずることを確認できた。

### マイネッケの事例（1905年）

フリードリヒ・マイネッケのシュトラーズブルク大学への招聘（1901年）は、いわゆる「シュパーン事件」をともなっており、政治的事件である。これにたいして、彼のフライブルクへの移籍は——すくなくとも彼自身の記述にもとづかぎりでは——待遇問題にかかわって生じた案件である。ゲオルク・フォン・ベロウからフライブルクに来ないかと誘われた彼は、つぎのように対応した（Meinecke 1969: 170）。

私は、もしもフライブルクがシュトラーズブルクを上回る年俸を提供するのであれば、移

籍すると回答した。この回答によって、もしもシュトラースブルクがフライブルクと同額の年俸を提供するならば、私はシュトラースブルクにとどまることを彼 [=ベロウ] に理解させた。

マイネッケ自身はシュトラースブルクにとどまるつもりだったが、ベロウからの連絡を受けたバーデン政府は、マイネッケ獲得がややむずかしそうだと判断し、さらに300マルクを上乗せした新たな加俸額を提示する。そしてこの加俸と同額の待遇をシュトラースブルク側が拒否したため、マイネッケは失望し、フライブルクへと去る (ebd.: 170 f.)。このときバーデン側で直接対応したのはフランツ・ベームだったが、おそらくアルンスペルガーと協議のうえ、こうした対応をしたのであろう。

#### アルンスペルガーの研究者獲得方針とヴェーバー

マルクス、シュルツェ=ゲファールニッツ、リッケルト、マイネッケ、ヴェーバーのケースを突きあわせると、アルンスペルガーの研究者獲得方針が明瞭になる。

アルンスペルガー (とベーム) は、他大学の正教授を引きぬこうとする場合、相手大学の本俸よりもどの程度上げれば移籍させることができるかを勧案し、できるだけ低い加俸で収まるよう対処する (マイネッケのケース)。

招聘しようとする若手研究者を他の邦国の大学も獲得しようとしている場合、競争相手の大学の初任給 (本俸) と同じ額をその人物に提示し、諸手当などの待遇をしめす (リッケルトとヴェーバーのケース)。それとともに、バーデンにおける学問の自由および教職の自由の保障を、また大学の自治の尊重を確約し、とりわけアルトホフのように念書で縛りつけたり移籍を妨害したりすることはけっしてないと明言し、「本俸が同じなら自由の国バーデンへ」という方向へと誘う (ヴェーバーのケース)。

付言しておく、ヴェーバーの場合、アルトホフがベルリン大学員内准教授として与える年俸はわずか2000マルクだから、このような低い額はもとより問題にならない。アルトホフがヴェーバーをベルリン大学の正教授に就けて任命しないことを、すでにアルンスペルガーは見抜いている。しかし、アルトホフが、ヴェーバーのフライブルク移籍を阻止するために、プロイセンの地方大学の正教授ポストをみつめてくるという策を講じる可能性もある。そこでアルンスペルガーは、ベルリン以外のプロイセン諸大学の初任給の最高額が4000マルクであることから、この額をヴェーバーに提示し、この俊英を確実にバーデンのものにしようと図ったのである。

一方、競争相手がいない場合、バーデンの財政状況を考え、アルンスペルガーは、若手にたいして非常に低い待遇をしめし、それを押しとおすという冷酷な一面を有している (マルクスのフライブルク就任のケース)。

しかしまた、実績のある優秀な研究者が研究条件等について要望を出してくる場合には、可能なかぎりそれを受け入れる姿勢をもち、「バーデンの文部官僚は話がわかる」という評判をもって信用を確保する。ここに紹介したシュルツェ＝ゲファーニッツのケース、マルクスのハイデルベルク移籍のケースのほか、すでに拙著において紹介したカール・ラートゲンのケースがこれである（野崎敏郎 2011: 165-170 頁）。

以上のように、敏腕官僚アルンスペルガーは、情報を集め、状況を正確に読んだうえで、慎重に適切な手立てを講じ、しばしばアルトホフを出しぬき、優秀な研究者を獲得し、将来にわたってバーデンの大学が確固たる地位を保つよう、深謀遠慮を欠かさなかったのである。

つぎに、アルンスペルガーが関与していない事例、また複数の大学間で引き抜き競争が生じていた事例をみよう。

## IV-2 ハンブルク拓殖研究学院をめぐる人事例

### アルフレート・ヴェーバーの事例（ハンブルクとハイデルベルク）

アルフレート・ヴェーバー（以下「アルフレート」と略記）は、1899年にベルリン大学で教授資格を取得し、教鞭を執る。1904年に、彼にたいして、ヴィーン、プラハ、ハンブルクから就任要請が来ており、彼はそれぞれの条件について吟味している。

このうち、ハンブルク学術財団は、1908年に開学が予定されていた<sup>(10)</sup>ハンブルク拓殖研究学院（Hamburgisches Kolonialinstitut und das allgemeine Vorlesungswesen）のために、国民経済学教授の招聘工作をすすめており、ドイツ全土の国民経済学担当正教授・員内准教授・員外准教授たちと、すでに注目すべき学術的成果を挙げている私講師たちとをリストアップし、業績・教育能力・人物の《品定め》をおこなっていた。財団総裁<sup>(11)</sup>ヴェルナー・フォン・メッレ（1853-1937）は、1904年4月5日付アルフレート宛書簡において、商業者向け国民経済学講座の客員教授を委嘱し、将来的にこれを常設の教授ポストになす計画があることをしめしている（Weber, A. 2003: 541）。

またアルフレートは、アルトホフからも、ボン大学の員内准教授職（後述するゴートハインの臨時代行職）に就任するよう求められるが、結局、1904年7月にプラハ・ドイツ語大学の正教授に任命されたのを受諾することに決める（ebd.: 543）。弟のこの決断について、兄マックスは、プラハ赴任が最善とは言えないが、「アルトホフの压制下に置かれるよりはましだ」と評している（MWGII/4: 203, 225）。

しかしハンブルク側は、1905年春にプラハに移ったアルフレートに、なおアプローチを続ける。フォン・メッレは、1905年から翌年にかけて、ヴァルター・ロッツを通じて、アルフレート（と他の候補者たち）の意向に探りを入れる。そして、有能であることと、招聘の可能性が低くないことから、アルフレートをとくに重視したフォン・メッレは、1906年10月10

日付ロツツ宛書簡において、アルフレートの健康状態について尋ね、また彼は感情に走りやすく、それゆえ気まぐれなところがあるのではないかと、社会政策的にいささか穏健さを欠き、そのためハンブルクに向かないのではないかと、そして、彼が満足する俸給はどのくらいかと尋ねている (StAH/361-5 I. 1201/II: 36)。ロツツは、これを受けて、まずアルフレートに書簡を送り、その回答の内容を10月24日付でフォン・メッレに伝えている。それによると、アルフレートは、基本的にハンブルクを嫌ってはいないという。そして招聘に応ずるさいの条件としては、①人並の俸給、②市議会が、自分の地位を生涯にわたって保障していること、また議会内の扇動的な者たちが自分を挑発しないこと、③ハンブルクの組織体が大学に比肩しうるものだという見込みがあること、この三点を挙げたとのことである (ebd.: 43 f.)。

この三点にかんして関係各方面との調整を図ったフォン・メッレは、1907年2月14日付アルフレート宛書簡において条件を提示している<sup>(12)</sup>。諸条件のうち俸給にかんしてしめすと、当初、本俸7000～1万マルク、4年勤続で年功加俸各1000マルクを三回まで可とする予定だったが、市議会がこれを削り、本俸7200～9000マルク、3年勤続で年功加俸各600マルクを三回まで可とした。しかし議会側との再調整の末、本俸8000～1万マルク、4年勤続で年功加俸各1000マルクを三回まで可とすることで落ち着いた (StAH/361-5 I. 1201/II: 93 f.)。この最終条件だと、着任の12年後に本俸は1万1000～1万3000マルクになり、またそれ以外に、たとえば各種研究所などの附置機関の長に任ぜられれば役職手当がつくので、聴講料と合わせると相当な金額になる<sup>(13)</sup>。

このように、フォン・メッレは、アルフレートの希望を最大限に実現するよう尽力するが、それにもかかわらずアルフレートは辞退する。さらに紆余曲折の末、ハンブルク側は、カール・ラートゲンをハイデルベルクから引きぬくことに成功する。そしてアルフレートは、ラートゲンが去ったあとのハイデルベルクのポストを継ぐのである。

このとき、ハイデルベルクの待遇をめぐって、アルフレートとバーデン文部省とのあいだで交渉がおこなわれた。当初1907年6月22日付でフランツ・ベームが提示した年俸額は4600マルクで、これに住居手当1200マルクがつく。聴講料について、前任者ラートゲンの過去3年間の平均額が4200マルクなので、年収総額は1万マルクほどの見込みで、さらに博士論文審査料が加わる。これにたいして、6月28日にベームとアルフレートとが協議した結果、年俸額は5600マルクに引き上げられ、またゼミナール運営関連費も引き上げられた (Weber, A. 2003: 546-548)。

ハイデルベルクにおけるこの最終的な条件においては、本俸と聴講料との合計額は9800マルクほどである。これにたいして、後述するラートゲンとゴートハインのハンブルクにおける聴講料額は1万2000～1万4000マルクと見込まれており、もしもアルフレートがハンブルクを選んでいれば、初年次の本俸と聴講料との合計額は2万～2万4000マルクになっていたと見込まれる。そして重要なのは、ハイデルベルクの最終的な待遇が、明らかにハンブルクに

はるかに及ばなかったにもかかわらず、アルフレートがハイデルベルクを選んだことである。彼は、たしかに年俸や教育負担や研究上の便宜をも考慮しながら自分の身の振りかたを思案しているが、それよりも、勤務校が確固たる自治権を有していて、自分の身分が保障されており、研究活動においても教育活動においても、また大学外における言論活動においても、自由かつ主体的に振るまう自己決定権が確約されているか否かが最重要事項だったのである。このことは、上述したロッツ報告にもはっきり記されている。

### ゴートハインの逡巡と最終決断

アルフレート・ヴェーバー以外にも、ハンブルク拓殖研究学院から就任要請されながら辞退した人物がいる。エーベルハルト・ゴートハインである。彼は、ボン大学に勤務していた1898年頃から、大学の自治をめぐるアルトホフと対立しており（Maurer 2007: 141）、プロイセンからの脱出を考えていた。そして、ケルン商科大学を経て、ハイデルベルク大学から招聘され、マックス・ヴェーバーの後任として、1904年に着任する。そのさい、やはりアルトホフから侮辱めいた扱いを受けた模様である（Becht 1990(2): 62）。

着任後しばらくして、ゴートハインは、ハンブルクから就任を打診される。ハンブルク市の高等教育担当参事官マックス・フェルスター（1866-1960）は、ドイツ各地において候補者の詳細な調査をおこない、1907年3月初旬頃にゴートハインとラートゲンに直接会っている（StAH/361-5 I/1201: 110）。これ以降、この両名へのアプローチがすすめられ、フェルスターは、1907年5月30日付で、国民経済学正教授としてラートゲンを、歴史学正教授としてゴートハインを推薦している（ebd.: ohne Numerierung）。同日に、フォン・メッレはハンブルク学術財団事務局および高等教育局において両名の任命を表明する（Melle 1923/24(1): 415 f.）。この事実から、両名とも就任を内諾したと考えられる。そしてラートゲンは秋にハンブルクに移籍するのだが、ゴートハインは結局辞退する。

ゴートハインに提示された条件は、上記のアルフレートにたいするハンブルク側の提示と同様だと思われ、またゴートハインの受けとる聴講料は1万2000～1万4000マルクと見込まれていた（1907年6月11日付フェルスター文書，ebd.: ohne Numerierung）。しかしゴートハインは、ハイデルベルクとマンハイムの職務にたいする愛着が強く、長い思案の末、6月6日付フォン・メッレ宛書簡において、ハンブルクの関係各方面への謝意を呈しながら謝絶している（Melle, a.a.O.: 416）。ゴートハインは、未知の機関における新しい任務にたいして尻込みしたわけではなからうが、前述のアルフレートの危惧にもしめされているように、ハンブルクにおいては市議会の圧力が無視できず、また教員の自治権が保障されていないことから、アルトホフ体制とは別種の苦境が待ちかまえている可能性を否定できず、いま自分がハイデルベルクで心置きなく仕事に励むことができている境遇をあえて捨てる理由がとくに見当たらなかったであろう。



## ベッカーのハンブルク拓殖研究学院退職

ハンブルク拓殖研究学院の組織と運営にかんする疑念、とりわけ行政側と市議会側の意向が優先されることと教員の自治権が保障されていないことにかんする疑念は、多くの教員たちが共有しており、学院を大学へと改組すべきだという意見が強くなっていった。なかでもその急先鋒に立っていたのがカール・ハインリヒ・ベッカーである。結局彼はボン大学から招聘されたのを受諾し、学院に見切りをつけて退職するのだが、これはひとつの事件であった。彼の1913年8月6日付転出願(フォン・メツレ宛)を読もう(StAH/361-6/I 5/CHB: 9 f.)。

閣下

小職は、この書状をもちまして、小職が、ボン大学への移籍を最終的に決断したことを、謹んで申し上げます。したがいまして、閣下にたいしまして、可能ならば、10月1日をもちまして、ハンブルクの国務を免ずることを、ハンブルク市政府に働きかけていただきますようお願い申し上げます。

閣下におかれましては、小職が属する上級官庁の長として、小職の5年間の在職中の営みにたいしまして、つねに並々ならぬご関心をお寄せいただき、またたゆまぬご助成を賜りましたので、小職は、なぜ小職が当地で衷心から育んでまいりました活動を、現在の状況下で放棄せざるをえなかったのかを、閣下に詳述する義務がございます。

小職は、商人の息子として生まれ、当初、拓殖研究学院計画の任務につよく心を寄せており、国際的教育機関の成功を確信しておりました。といいますのは、ハンブルクは、なんといっても拓殖研究学院をそれにふさわしく整備する手段に事欠かないからです。しかし最初の数年でわかったことは、その見込みはまちがっていたということでした。商人層はどんどんいなくなり、つまり聴講者たちはまったく姿をみせなくなりました。ここ数年の見事な建物の改修、その徹底的な宣伝も、この有様を変えることは叶いませんでした。聴講数は、ゆっくりと、しかし確実に年々減っていき、ついには、植民庁から派遣された官僚層の聴講者たちだけが残ることになるでしょう。最初のうち、小職には、当地ですでに長いあいだ議論されてきた大学設立計画が拓殖研究学院の目的に不可欠だとは思われなかったのですが、時間が経ち、拓殖研究学院が死に近づいていくにちがいないことがみえるにつれ、歴史的に確立されてきたドイツの高等教育機関の形態すなわち大学という形態が、新たな活力で学院を満たしてくれるのではないか、それを試してみたらどうかという認識に至りました。かくて小職は、ハンブルクの利益を考えたときにもまた大学の理念の先駆者となったのです。

このとき、こうした事情に精通している人たち全員が辿らざるをえないこの思考過程は、ハンブルク市政府に、大学設置議案の提出を求めるものです。これによって、拓殖研究学院は、あらゆる方面から出現する競争相手に対抗する戦いにおける必須の背面防御を授かることでしょう。学問におけるハンブルクの計画の任務に、われわれ教授陣は喜んで従事いたし

ますし、小職は去っていきますので、いま、新しいもの、まさにハンプルクに有用なものを創造しようとする意志を教授陣全体が共有していると小職は公言してしかるべきです。ドイツの学問界が、ピンと張った緊張をもって、われわれがハンプルクで着手した新しいもの、国際的なもの、拓殖にかんするものをみてきました。もちろん、反対意見も、悪意にもとづく意見さえも引きおこされましたが、われわれの問題提起が模倣されることがしばしばありました。しかし、ハンプルク全体がわれわれの仕事を支持しているとわれわれが信じているかぎり、必要なのは、この事業に心を配ることなのです。拓殖研究学院を大学形態に改組するために、たしかにいま一度ハンプルクというしかるべき土台がありましたし、その土台のうえにはじめて大学が設立されます。そうすれば、われわれは、この新しい学問をもって、ドイツにおいて先頭に立ってすすむことでしょう。

残念ながら、この希望は現実的なものではありません。ハンプルクの学問の基本的な組織について判断する代わりに、実際に事情に精通している人々に、とりわけハンプルク市政府に任せきりにしているのが、影響力の大きなハンプルクの諸集団です。とりわけ商業会議所および当地の一部の新聞は、当地で彼らの影響下に晒されている不特定の人々を蒙昧にするあらゆることを企て、ハンプルクの学術的な営みを、外へ向かって誹謗して信用を失わせ、その学問の担い手たちを、内に籠もって労働意欲をもつよう仕向け、そして残念なことに、これまでの大学設置議案のハンプルク市議会による取り扱いは、同様の意識でなされてきました。有力な反対意見にあつては、われわれが熱望する目標は、われわれの学問の存立の基礎を獲得するための困難な戦いなしに、手間暇のかかる過渡的諸段階なしに、そして取り返しがつかないかもしれない妥協によって、結局実現されないままになり、そしてそうになってしまうまでに何年も過ぎ去ってしまうことでしょう。

そうこうするあいだに、ドイツは、ハンプルクが学問を志す若者に門扉を開くまで待つことができません。いま、世界におけるドイツの地位を説き、外国における諸課題を教えて、学問を志す若者を感化するため、多くの大学に、国際的な関心をもつ学者たちが招かれています。

こうした状況は小職においてもまた同様であり、この種の就任依頼が小職にも出されました。ほかでもなくそうした依頼を小職は受諾したのです。といいますのは、最終的に、当地においてもやはり不可避の大学組織形態実現するために、諸集団——彼らの真の利益になら小職は喜んで奉仕しようと思うのですが——とたえず対立して、ひょっとするとこの先何年もかかる戦いに神経を磨りへらすのがいいのか、それとも、すでに用意された環境において、ハンプルクの学問の意味における私の研究を、わが国の大規模大学のひとつ〔＝ボン大学〕に在学する学問を志す若者にいますぐ教示するのがいいのかについて、決断せざるをえなかったのです。プロイセン政府が小職を好意的に迎えてくれるかどうか、しばらく判断しかねておりました。なぜなら、当地における小職の研究は、いささか逸脱したものになった

からであり、また、小職は、同僚たちから、また商人たちから、さらに大学設置に反対する者たちからさえ、当地に残留することを求められていたからでもあり、そしてなによりも、小職の個人的な研究の助成を、閣下から賜り、また閣下によって立法上の諸要素を確保していただいたからです。しかし最終的に、やはり小職における活動上の必要性が勝りました。小職にとって、ボンには、当地ほど立派な教室・教具・教材は利用に供されておりませんが、小職の研究活動には十分すぎるほどであり、このことが小職にとって決定的でした。しかしながら、研究室に閉じこもろうとする純然たる書齋学者でも先師なき奇人でもないハンブルクの人文科学系の研究者・教員諸兄全員に感謝したいと思います。

願わくば、閣下におかれましては、小職の決断を諒とされますように、このことをお願いし、本状をもちまして、職務免除願といたします。閣下の下で働いたことをつねに思い返し、プロイセンにおける国務におきましても、閣下がハンブルクの利益と帝国の利益とを当地において実現なさろうと望んでおられるのと同じ思料に立って奉仕いたします。

C・H・ベッカー

たいへん興味深い重要書簡である。とりわけここで語られているベッカーの個人的決断が、やがて彼個人の思惑を超え、プロイセンにおける高等教育の改革へと向かっていくのであり、この転出願は、彼の新たな道の出発点に位置している。

また、教員の研究の自由は、教員による教育の裁量権と係わっており、これは学生側の研究の自由と結びつくのだが、そうしたドイツの大学の伝統に立たないハンブルク拓殖研究学院の硬直性・狭量性は、ハンブルクに來た若者たちの失望ないし学修意欲の減退を招いていたと思われる、その実情を垣間見ることもできる<sup>(14)</sup>。この事態は、資格社会であるドイツに生きる学生たちの多様な要望や、いわゆる「出口」（＝職業上の地位の向上）の問題に、学院が十分に対応できていないという弱点をしめすものでもあろう。

#### ラートゲンのゲッティンゲン移籍問題

このときベッカーを慰留していたカール・ラートゲンもまた、すこしあとの時期に、グスタフ・コーンの後任としてゲッティンゲン大学に移籍しようと企てる（1918年）。ここにはいくつかの事情が絡みあっているが、ラートゲンが希望していたハンブルク拓殖研究学院の大学への改組がいっこうにすすみそうにないということも、彼の重要な移籍動機のひとつであった。彼が1907年にハンブルクに着任したときの初年次収入は2万5000マルクに達していたが<sup>(15)</sup>、彼もまた、報酬よりも自由と自治を優先的に考えるようになっていたと思われる。新聞では、すでに彼のゲッティンゲン移籍が決定したとも報じられたが<sup>(16)</sup>、フォン・メッレの慰留により、ラートゲンはハンブルクに残留し、第一次世界大戦後、彼は、ようやく本決まりになった学院のハンブルク大学への改組のために尽力する。彼は病気のため学長職を退き、

1921年に亡くなるが、同年3月11日の大学評議会にいたるまで、健全な大学組織をどのように確立するのかを思案しつづけた（StAH/364-5 I. C 20.4.1: 126 f.）。

### ドイツの大学教員たちの意向

マックス・ヴェーバー、アルフレート・ヴェーバー、ゴートハイン、ベッカー、ラートゲンらにとって——それぞれ温度差はあるが——、待遇の良し悪しよりも、大学の自治——正確には大学教員の自治——のほうが重要だった。彼らは、文部官僚や財界関係者や議会勢力の意向を伺い、《雇われ者》として首をすくめながら職務に埋没するのではなく、大学の自治の主体として、みずからの学識と良心とに——そのみに——従って、研究・言論・教育活動をし、また確固たる地位に立脚して、官僚や財界や政治家たちにたいして提言をなそうとしたのである。ハンブルク拓殖研究学院は、財力にものをいわせて優秀な教員の確保を企てたが、それがかならずしも奏功しなかったのは、アルトホフの圧制に端的に顕現していたドイツの大学の問題状況を否応なしに体験した教員たちが、大学人の矜持をもって学院の問題性を見抜いたからである。個人的にアルトホフと親しかったラートゲンにあってもまた、ハイデルベルクからハンブルクへの移籍は、アルトホフに凭りかかってきた自分の人生行路を振りかえり、独立した人格として新しい一歩を踏みだそうとする企てであったように感じられる<sup>(17)</sup>。

## V アルトホフ体制にたいする闘争の所在

1890年3月のビスマルク失脚、および彼が目論んでいた社会主義者鎮圧法に代わる弾圧策の挫折は、ドイツの大学にさまざまな影響を及ぼした。アーロンス問題は、まさにこの1890年に浮上しており、鎮圧法の失効と同時期に、アーロンスは、社会民主党の活動に積極的に参加していく。

ベルリン大学の教員たちと、プロイセンの官僚政治家たちとのあいだに、拠って立つ社会的基盤、教育過程、メンタリテートにおいて差はなかった。しかし、社会民主党にたいする態度においては、両者は際立った対立をみせている。ベルリン大学哲学部は、たとえ本人が社会民主党員であっても、「非官吏の教員で、しかも学内秩序を乱すほどの言動を示さない限りは、学部は大学の自治・学問と教授の自由・思想信条の自由という近代的大学観と伝統的な **Korporation** 原理を最大限に行使してまでも、当該教員を擁護した」。これにたいして、官僚たちは、「君主に対する『服務宣誓』（忠誠・服従・義務）によって、国民よりも国家に対する結び付きを自覚し、専門的な知識の訓練と倫理的自律性の習得と、それに伴う高い地位と誇りと将来の保障」を有しており、彼らにとって、エルフルト綱領における「人民による官吏の選出」という政治的要求は、彼らの誇りを傷つけるものにほかならなかった（杉浦忠夫 1991（2）：3-4頁）。

なかでもアルトホフとエルスターは、みずからが大学教員の経歴を有しており、この二人は、他の大学教員たちの精神性を肌で感じ、それを嫌悪し、そこから離脱して大学行政官への道を選び、その権力をもって大学教員たちと対峙した。こうしたアルトホフの思想性・危険性を熟知していたのが、かつてアルトホフとともにシュトラースブルク大学法学・国家学部に勤務していたハインリヒ・ブルンナーとグスタフ・シュモラーである。ブルンナーは1873年春にベルリン大学法学部に、シュモラーは1882年春にベルリン大学哲学部に移籍し、アルトホフは1882年秋にプロイセン文部省に着任する。その後、たしかにシュモラーは、さまざまな人事において、アルトホフに助言し、それによって大きな影響力を得ることになるが、大学の自治の問題にかんしては、元同僚のアルトホフと、またやはりかつてシュトラースブルクの同僚であったラーバントとも、妥協なき対立関係にある。シュモラーとブルンナーは、ラーバントのベルリン招聘に反対し、アーロンス追放に反対し、さらにアルトホフ引退後に生じたベルンハルト問題にかんしても、シュモラーは大学の自治を擁護する主張をアルトホフに説きつづけたが、アルトホフはこれを峻拒したまま1908年に亡くなる<sup>(18)</sup>。アルトホフ引退後はエルスターがプロイセンの大学行政を切りまわすが、エルスターが1916年に退職すると、代わって、本稿で紹介したカール・ハインリヒ・ベッカーが抜擢された。このベッカー人事は、ブルンナーの高弟フリードリヒ・シュミットの意向によるもので、シュミットは、ベッカーを起用することによって、プロイセンの大学行政の転換を目論んだとみられる（Wende 1959: 40 f., Schmidt-Ott 1952: 146）。

こうして、アルトホフとエルスターの支配は、1918年の革命を待つことなく、すでに1916年に、シュミットの手によって退けられた。第二帝政末期からヴァイマル期にかけて、シュミットに招かれたベッカーのテコ入れによって、大学の自治が息を吹きかえし、アルトホフ体制下で不遇を余儀なくされていた研究者たちが、彼らにふさわしいポストを獲得しはじめ、アーロンスは復権を果たし、アーロンス法は1922年に廃止される。

この成果は、大学をめぐる種々の閉塞状況の元凶であるアルトホフとその体制にたいして、シュモラー、ブルンナー、ヴェーバーらが果敢に立ちむかった闘争によって勝ちとられたものである。その全過程を見据えたとき、アルトホフの圧制がもっとも顕著であった1893～94年に、私講師・員内准教授という不安定で弱い立場にあったヴェーバーが、その直面した事態にたいして賢明に対処し、アルトホフの策動を退けたというケーススタディは、われわれに多くの示唆と教訓を与えてくれる。

本稿では、こうした歴史的過程のなかでみられた人事事例を紹介してきた。本稿はまだ素描にとどまっており、また本稿で紹介した以外に、今回の調査で確認できた重要史料がいくつもある。これらをさらに精査し、ドイツの大学における——また大学をめぐる——闘争史の全体像を解明することが、次の課題となる。

〔注〕

- (1) この会議の結果については、すでにフリートヘルム・ビーゼンバッハが紹介している（Biesenbach 1969: 200 f.）。
- (2) 実際には、1896 年秋に、経済学領域が哲学部から法学部に移管され、そのさい経済学正教授ポストがひとつ増やされ、その第二正教授ポストにシュルツェ＝ゲファールニッツを就けるというかたちで、この問題は解決された。これについては後述する。さらに、1897 年春にヴェーバーがハイデルベルク大学に転出し、その後任としてフックスを迎えた結果、フライブルク大学法学・国家学部の経済学部門は、シュルツェ＝ゲファールニッツとフックスの二人の正教授によって運営されることになる。
- (3) マルクスは、ヴェーバーと同様に、ベルリンからフライブルクに移籍しようとしたとき、アルトホフが、自分を下僕のように扱ったことを知り、嘆いていた（野崎敏郎 2021-22(1)：44 頁）。
- (4) マルクスは、ヴェーバーの叔父ヘルマン・バウムガルテンに師事していた。修学時代のマルクスとヴェーバーとの交友関係について、あまり記録は多くないが、たとえば 1889 年 12 月頃、ヴェーバーはマルクス宅を訪問するが、マルクスの新妻フリーデリケが不在だったことを残念がっている（ヘルマン・バウムガルテン宛書簡，MWGII/2: 212）。またヘルマン・シューマッハーは、ヴェーバーがときおりマルクスと連れだっていたことを記している（ebd.: 23）。
- (5) ただし、ハイマンがゴルトシュミットのポストを継いだのかどうかについては、まだ確認できていない。ブルンナーは胃癌を患い、1915 年 8 月に亡くなる。したがって、ハイマンは、闘病中のブルンナーの代講者ないしブルンナーの後任という位置づけであった可能性がある。この点は今後調査・確認したい。
- (6) 正確には「正教授就任時年俸」だが、簡単に「初任給」と記す。以下同様。
- (7) マルクスが去ったあと、1892 年に第 4 位だったブッシュ（Wilhelm Busch, 1861-1929）がフライブルクに赴任している。
- (8) 彼はその後 1900 年夏学期にも研究休暇を取得している。
- (9) ビエルマーの 1903 年の調査による（Biermer 1903: 49）。また、ロストック大学に勤務していたヴィルヘルム・ブラウネの履歴書によると、ブラウネが 1880 年にロストックに着任したときの初任給が、たしかに 4200 マルクであった（GLA 235/1830: Standes-Liste）。
- (10) 開学前の 1907 年に、すでに授業が開始されている。
- (11) ハンブルク市長フォン・メッレが、ハンブルク学術財団総裁を兼任していた。
- (12) この書簡の現物はアルフレートに送付されたので、史料として遺されているのは浄書する前の下書である。
- (13) なお、この文書では、住居手当には言及されていない。
- (14) この転出願について、またその周辺事情については、今後立ちいって考証することにして、本稿では全文の紹介に留めておく。
- (15) これは年俸（本俸）・聴講料・諸手当等を合わせた金額である。1908 年 12 月 1 日にラートゲン家を訪問したエルヴィン・ベルツは、成功者として振るまったと思われるラートゲン夫妻に、あまりいい印象をもたなかったようだ（ベルツ 2000: 297 頁）。
- (16) *Hamburgischer Correspondent*, Nr.359, Abend-Ausgabe vom 16. Juli 1918.
- (17) ラートゲンのハンブルク移籍にはさまざまな要因が絡みあっている。その詳細について、本稿では立ち回らない。
- (18) 1908 年に、シュモラーとアルトホフとのあいだで、ベルンハルト問題をめぐって書簡が交わされており、そのなかで、アルトホフは、大学の自治よりも官僚による統治のほうが優越すると強弁している（野崎敏郎 2016-(2)：42-43 頁）。

〔未公刊史料〕

- GLA 235/1830: Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Diener Braune Dr. Wilhelm aus Großthiemig, Preuss. Prov. Sachsen. Generallandesarchiv Karlsruhe
- GLA 235/2291: Großherzogthum Baden. Ministerium [der Justiz,] des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg [Freiburg]. Diener Marcks, Dr. Erich. Generallandesarchiv Karlsruhe
- StAH/361-6/I 5/CHB: 361-6. Hochschulwesen. Dozenten- u. Personalakten I 5. Oberschulbehörde, Sektion für die Wissenschaftlichen Anstalten. Personalakten des Professors Dr. Carl Heinrich Becker (1908-1933). Staatsarchiv Hamburg
- StAH/361-5 I. 1201/II: 361-5 I Hochschulwesen I. Vorlesungswesen 1201. Besetzung der ständigen Professur für Nationalökonomie, Bd. II. Verhandlungen mit auswärtigen Dozenten 1904-07. Staatsarchiv Hamburg
- StAH/364-5 I. C 20.4.1: Protokolle der Sitzungen des Universitätssenats. Bd. II. 51 - 118. Sitzung, 1. Oktober 1920 bis 13. Juli 1923. Staatsarchiv Hamburg
- UAF/B 38/19: Protokolle der philos. Fak. (einschl. Promotionen u. Habilitationen) Band 11, 1886-1894. Universitätsarchiv Freiburg
- UAF/B 24/3012: Grossherzogl. Badische Universität Freiburg. Diener. Dr. Rickert Heinrich aus Danzig. Universitätsarchiv Freiburg
- UAF/B 24/3510: Grossherzogl. Badische Universität Freiburg. Diener. Dr. von Schulze-Gävernitz Gerhard [sic]. Universitätsarchiv Freiburg

〔文献〕

- Becht, H-P. 1990: Prof. Dr. Eberhard Gothein (1853-1923). *Karlsruher Transfer*, 4 Jg., Nr.6 u.7
- Biermer, M. 1903: *Die Rechtsverhältnisse der deutschen Universitätsprofessoren*. Gießen: v. Münchow
- Biesenbach, F. 1969: *Die Entwicklung der Nationalökonomie an der Universität Freiburg i. Br. 1768-1896; Eine dogmengeschichtliche Analyse*. Freiburg i. Br.: E. Albert
- Breysig, K. 1962: *Aus meinen Tagen und Träumen; Memoiren, Aufzeichnungen, Briefe, Gespräche*. Berlin: W. de Gruyter
- Drüll, D. 1986/2019: *Heidelberger Gelehrtenlexikon 1803-1932*, 2. Aufl. Wiesbaden: Springer
- Maurer, M. 2007: *Eberhard Gothein (1853-1923) ; Leben und Werk zwischen Kulturgeschichte und Nationalökonomie*. Köln: Böhlau
- Meinecke 1969: *Friedrich Meinecke Werke, Bd.8. Autobiographische Schriften*. Stuttgart: Koehler
- Melle, W. v. 1923/24: *Dreißig Jahre Hamburger Wissenschaft 1891-1921; Rückblicke und persönliche Erinnerungen in zwei Bänden*. Hamburg: Broschek
- MWGH/2: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. II, Bd.2. Briefe 1887-1894*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2017
- MWGH/4: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. II, Bd.4. Briefe 1903-1905*. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2015
- Schmidt-Ott, F. 1952: *Erlebtes und Erstrebtes 1860-1950*. Wiesbaden: F. Steiner
- VVB: *Verzeichnis der Vorlesungen*. Königliche Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin
- Weber, A. 2003: *Alfred Weber Gesamtausgabe, Vd.10. Ausgewählter Briefwechsel*, zweiter Halbband. Marburg: Metropolis
- Wende, E. 1959: *C. H. Becker, Mensch und Politiker; Ein biographischer Beitrag zur Kulturgeschichte der Weimarer Republik*. Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt
- Zielenziger, K. 1926: *Gerhart von Schulze Gaevernitz; Eine Darstellung seines Wirkens und seiner*

マックス・ヴェーバーのフライブルク大学移籍をめぐって（野崎敏郎）

Werke. Berlin: R. L. Prager

上山安敏 1978『ウェーバーとその社会——知識社会と権力——』ミネルヴァ書房

上山安敏他編 1979『ウェーバーの大学論』木鐸社

今野元 2020『マックス・ヴェーバー——主体的人間の悲喜劇——』岩波書店

杉浦忠夫 1991「アーロンス事件——ヴィルヘルム時代のベルリン大学人事紛争——」（1・2）『明治大学人文科学研究所紀要』29, 『明治大学教養論集』233

野崎敏郎 2011『大学人ヴェーバーの軌跡——闘う社会科学者——』晃洋書房

野崎敏郎 2016『ヴェーバー『職業としての学問』の研究（完全版）』晃洋書房

野崎敏郎 2016-「『闘争する人格』と大学問題——『職業としての学問』をいかに読むか——」（1～5）『佛教大学社会学部論集』63, 64, 65, 67, 69（未完結）

野崎敏郎 2021-22「マックス・ヴェーバーにかかわる二つの人事の実相——フライブルク大学移籍とハイドルベルク大学正嘱託教授案件——」（1～4）『佛教大学社会学部論集』72～75

ベルツ（E）〔池上弘子訳〕2000『ベルツ日本再訪——草津・ビーティヒハイム遺稿／日記篇——』東海大学出版会

〔付記〕

本稿は、令和 3～5 年度科学研究費（基盤研究（B）、課題番号 21H00783）による研究成果の一部である。

（のざき としろう 公共政策学科）  
2022 年 11 月 15 日受理